

故鈴嶋剛夫様を偲んで

東京都立大学 理学研究科 野村 琴広

鈴嶋剛夫様が、2019年10月10日にご逝去されたとお話を頂き、とても残念に思っています。最初にこのお話を頂いてから時間が経ってしまい、大変申し訳ありませんが、企業を離れた立場ではありますが、今回執筆させていただきます。

鈴嶋剛夫様は、1962年に住友化学に入社、新居浜製造所に配属となり、64年に大阪製造所農薬研究部、1966年より前年に完成した高槻の中央研究所に異動となり、以降は2001年のご退職まで高槻の研究所で研究開発に携わりました。また、1987年3月には、母校である東北大学理学部化学科より「数種のオレフィン類及び菊酸系シクロプロパン化合物の異性化反応の研究」で理学博士の学位を取得されています。

シニア懇談会のメンバーの皆さんには紹介の必要も無いと思いますが、鈴嶋様は固体超強塩基触媒をはじめとする多くの触媒研究に携わり、例えば以下に記載の学会賞を受賞されています。平成元年度 日本化学会化学技術賞「固体超強塩基触媒の発明とそれを用いる工業プロセス（5-エチリデン-2-ノルボルネンの製造）」、平成2年度 日本農薬学会業績賞「立体変換反応による光学活性菊酸の合成」、平成5年度 日本化学会

化学技術賞「新規光学活性トリアゾール系植物生長調節剤および殺菌剤の発明と工業化」、平成7年度 触媒学会 技術賞「アルミナ系固体超強塩基触媒の開発およびエチリデンノルボルネン製造への工業的応用」（住友化学として）、平成12年度 触媒学会 学会賞（技術部門）「ニッケル-ホスフィン系錯体触媒による2,3-ジメチルブテン製造」、平成13年度 日本油学会 工業技術賞「界面活性剤の特性を活用するフラン誘導体の効率的な新合成法の開発と工業化」。

触媒関係の先生方や企業の方とのつながりも深く、特に周囲の企業の方と故田部浩三先生を定期的に訪問されていたと聞いています。当時の研究室には国内外から多くの方がいらしていた記憶があります。



1989年の研究室の集合写真

私個人が入社・配属された時は既に有機

化学(合成化学)研究室全体を管理されるお立場で、当時はゼオライト触媒(気相ベックマン転位)や均一系触媒(C1関連プロジェクト)等の数多くのテーマもある中で、特に固体超強塩基触媒と菊酸(不斉合成・ラセミ化)関係の研究テーマが鈴鴨様の直轄であった記憶があります。月に1度の研究報告会は、テーマの存続に向けて、限られた時間でオリジナリティーも含めてあるレベル以上のタイムリーな成果が要求されたので、当時の若手社員にはとても厳しい状況(プレッシャー)でしたが、ここで研究者としてあるべき姿勢を学んだのも事実です。

当時の鈴鴨様は土日も朝から晩までオフィスにいらっしゃる印象でした。毎日研究所に行かれるので、土曜日が休日になったことを奥様がしばらく知らなかったという話もありました。私共も(昨今は難しいのですが)休日は図書室で論文や専門書をじっくりと読むよい機会でした。ご退職後も触媒討論会など多くの学会に参加され、頻繁にディスカッションをされるとともに、頻繁に研究所の図書室に出入りされ、熱心に勉強をされておられました。



ご退職記念：清水様(当時広栄化学)と

研究室では厳しい一方、当時の一部の若手研究員とは忌憚のないディスカッション

に応じて下さり、現在は結実した多くの触媒関連の研究テーマの存続に多大なご尽力をされています。特に私の場合は企業化、論文博士に海外留学・派遣と、研究者として成長すべき大切な時期にご指導頂きました。

鈴鴨様は、2018年の年末に一人暮らしをされていた吹田のご自宅で倒れられ、脳梗塞、肺炎、心臓疾患が併発したために、以降は吹田の病院にありました。私個人はなかなかお見舞いに駆けつけることもできず、触媒討論会の初日の朝にようやくお見舞いに伺いました。当時、口調はしっかりとされており、病院を抜け出すので討論会の会場へ連れて行って欲しいとのことで、お断りにだいぶ苦慮しました。4月末に、ご家族が暮らしている近所である、東京・調布市の病院に転院されましたが、看病の甲斐もなく、残念ながら10月10日にご逝去されました。このような事態になってしまい、とても残念に思うと同時にご冥福を心よりお祈りするばかりです。

また、本稿の作成にご協力頂きました板垣 誠氏(住友化学)にお礼申し上げます。

(2020年8月31日)